

塩津港遺跡発掘調査 現地説明会資料

開催日 平成 20 年度(2008)11 月 15 日(土)

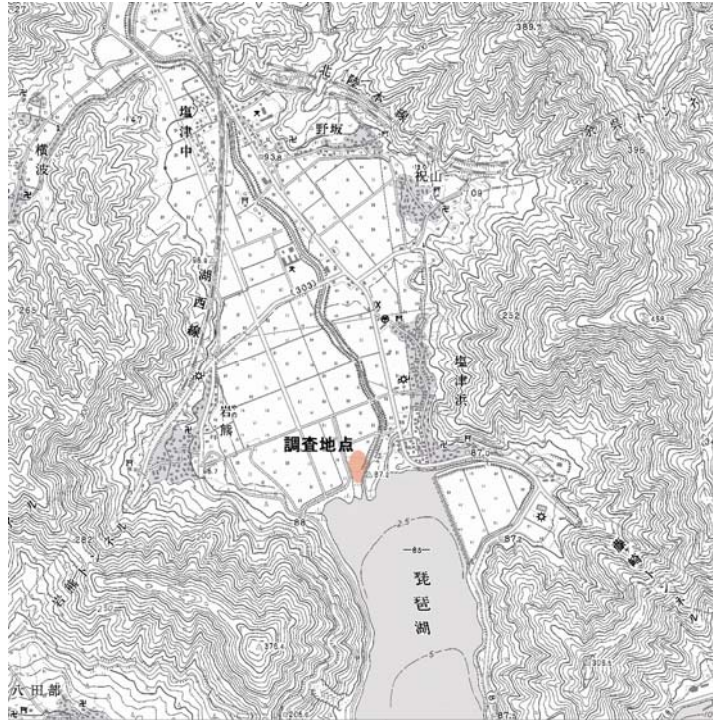
調査主体 滋賀県教育委員会文化財保護課

調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

1. 塩津港

塩津港（しおつこう）は琵琶湖の最北端に位置する港です。古くは天平宝字八年(764)の藤原仲麻呂(恵美押勝（えみのおしかつ）)の乱に塩津の名が見え、10世紀の終わりには越前に向かう父に伴った紫式部が塩津の神社に旅の安全を祈願しています。

奈良・平安時代から明治時代まで北国から京都に向かう物資の積み替え港として大変栄えました。



2. 平成 20 年度の発掘調査

調査地は大川(塩津大川)の河口に位置します(滋賀県伊香郡西浅井町塩津浜地先)。大川の河川改修に伴い平成 18 年度から約 3,000 m²を対象に発掘調査を実施しています。18・19 年度の調査において平安時代後期の神社跡が検出され、前例のない大型の木簡「起請文木簡」が多数出土したことは、すでに公開したところです。

今年度、引き続き調査を進めているところですが、神社の様子がさらに明らかとなってきています。堀は四周すべてに巡らされていることが確認され、神社は約 50 メートル四方の区画であったことが明らかとなりました。また南側正面からは鳥居の柱が検出され、新たに見つかった建物も合わせ、当時の神社全体の様子が明らかとなってきました。

さらに北側の堀から「神像」が出土しました。神像が出土した例はこれまで島根県青木遺跡の 1 体のみで、極めて希有な出土例となります。さらに、今回はまとまって 5 体出土し、作風も良く、その意義は大いに注目されます。また、華鬘（けまん）の部品も出土し、当時の神仏習合のあり方など、神社の様子を知るに貴重な資料となっています。



塩津港遺跡全景

3. 第1神社

約 50m 四方の区画を堀で囲んだ神社です。南側の中軸線上に入口が設けられています。ここは堀が途切れて土橋となっています。土橋を渡ってすぐの所で鳥居の柱を検出しました。太さは根元の所で約 50 センチです。当時、人々は堀を渡り、鳥居をくぐって参詣した様子がわかります。北に約 30m 進むと拝



鳥居

殿、正殿があります。周辺にも多くの建物の柱跡が検出され、多くの建物が立ち並んでいました。

正殿の東隣では井戸が検出されました。浅い井戸ですが曲物が据えられ底部には玉砂利が敷かれています。琵琶湖の水面に近いこともあり、これで十分に水が湧いていたものと考えられます。今でもこんこんと水が湧き出しています。神様用の井戸「神泉」と考えられます。



神泉

北辺には一直線に掘られた幅 30 センチほどの溝があります。形状や埋土から堀の基礎と考えられます。神社の北側は堀に加えて堀でも区画されていたことがわかります。

北東部からは門の跡が検出されました。掘立柱の構造ですが、一部に石材を並べて基壇を設けています。この門

から外に出るとそこは土橋となって北に向かうことができるようになっています。土橋を北に向って歩くと左側は沼、右側は堀となっています。

左側の沼は正殿の裏手にあたりますが、ここからも多くの遺物が出土しています。起請文木簡、幣串（へいぐし）、注連縄（しめなわ）、土師皿、瓦、桧皮（ひわだ）、板などで祭事に使われる品も多く見られます。ここも重要な祭事の間であったことを伺わせます。

4. 神社の存続期間

第1神社は11世紀後期から12世紀にかけて、約130年間存在しています。この間、建物は何度も建て替えられ、掘立柱の建物が礎石に替ったりしています。正殿も掘立柱から土台を持った建物に建て替えられています。

堀は当初、一回り内側に掘られています。堀は何度も掘り直されており、修復されるたびに外側に広がり、少なくとも4度は掘り直しています。北側の土橋も12世紀の改修で幅が2倍以上広がっています。

出土した木簡に書かれた年号で一番新しいものは建久二年（1191）です。遺跡もほぼこのころに終焉を迎えています。この後、土砂が遺跡の上を2m近く覆うのですが、この堆積層の中に鎌倉時代や室町時代に堆積したものはありません。江戸時代以降になってから堆積したものです。

遺跡は現在の琵琶湖の基準水位よりも約1.5m低いところに存在しています。琵琶湖の変動も考え合わせて、この神社の終焉を考える必要があります。

5. 第2神社

第1神社の南西に隣接する神社の区画を検出しました。堀で区画された施設で、同じく50m四方の規模であると考えられます。12世紀に造られたもので、第1神社と共存していたものと考えられます。ただ、出土する遺物や、検出される遺構の様子が異なり、第1神社とは違った祭事が行われる神社であったと考えられます。

南側の堀からは下駄や塗椀のほか祭事に使われたと考えられる陽物（オチンチンをかたどったもの）が数多く出土しています。

6. 神像（12世紀、平安時代末期）

神像は神社北側の堀から4体、東側の堀から1体、合計5体出土しました。高さが10～15cmを測る木製の小型の像です。地中に埋もれていたこともあり劣化していますが、神像2と3などは比較的状态が良くその表情もわずかながら見ることができます。

形状が判然としないものもありますが、全体のフォルムから男神像が2体、女神像が3体と考えられます。

神像1～4の4体は神殿の北10mほどの、堀の中から出土しました。この堀からは神像のほかに、板や桧皮・瓦などの建築部材、土師器皿・幣串・しめ縄などの祭礼の用具などが出土しています。

状態が比較的良好なのは神像2と神像3の2体です。

神像2は俗体の男神像で、当時の貴族の礼装をしています。冠を戴き、袖口を合わせて手を胸元で合わせた姿をしています。腰から下は造形が省略されています。彩色の痕は残っていません。目鼻の造形はほとんど残っていませんが、全体の顔の造形から穏やかな表情を偲ばせます。



神像2 (男神像)



神像3 (女神像)

神像 3 は俗体の女神像で髪を長く肩から下に垂らし、袖口を胸元へ持ち上げています。顔はわずかに造形が残り表情がわずかに観察されます。やはり穏やかな表情が浮かんできます。下半部は劣化して欠損しているところが多いですが、神像 2 と同じく膝などが省略されていると考えられます。

他の像は劣化が進んでいて詳細は観察しにくいのですが、男神像、女神像を表していると考えられます。



本来、神社には偶像は置かれなかったのですが仏教の影響を受け神仏習合の流れのなか神像が作られるようになります。僧形と俗体があり、奈良時代の終わりごろから作られ始め、等身大であったものがしだいに小型化し、平安時代の終わりごろには出土品に見られるような小像が造られるようになります。

神像は御神体と同様に扱われ、神殿の中にあり、人目に触れることができない神聖なものとしてきたものです。よって、仏像とは異なりその姿は一般に知れることが少なく、神官でさえ目にすることは避けるべき存在であったようです。発掘調査でも出土することはほとんどなく、これまでに島根県青木遺跡から出土した平安時代の 1 体が唯一の例となります。



土師器皿・幣串・しめ縄のセット



絵巻に描かれた蘇えの様子「春日権現験記絵」(鎌倉時代)

今回出土した神像のうち 2、3 は神殿の北側の堀底に転落したような状態で 1.5m ほどの距離を置いて出土しました。周辺で板や桧皮など建物の部材が多く出土しているところから、神像は神殿の崩壊に伴い一緒に転落したものと仮説を立てることができます。ただ、5 体も出土したこと、神像 5 が出土場所も状況も異なることなど、疑問は残ります。

神像が出土した堀の際には『幣串を 3 本束ね、しめ縄、土師器皿が添えられた』祭礼の様子を示した状態が検出されました。これと同じような様子は「春日権現験記絵」(鎌倉時代)に祓えの場面に描かれています。神像 3 はこの遺構の直下から出土しています。北側の堀は神社の中でも特別な祭場で、神像もこの祭事に使われた可能性も否定できません。

7. 華鬘 (けまん) 断片 (12 世紀、平安時代末期)

南側の堀の中から起請文木簡などと一緒に出土しました。木製の彫刻物で長さ 18.5 cm、軸の太さ 1.3 cm を測ります。下端部に房を上部に紐の結び目を表現しています。一部に漆状のものが付着しているのが観察され、金箔が貼られていた可能性があります。

華鬘は仏堂や神殿内の柱の上部などに飾られ、仏像が置かれる空間を装飾する板です。



出土した華鬘



木製華鬘の例

【塩津港遺跡出土の神像】

◆ 神像1

材質 : 針葉樹

サイズ : 高さ 11.7 cm、幅 7.9 cm、厚み 3.8 cm

備考 : 劣化大

一材から彫り出す。本像も損傷著しく、頭部および両腕、膝前を表す突起がかろうじて判別できる。右膝部の突起が大きく前に出ていることから、あるいは立膝の姿勢をとっていたことも考えられる。

◆ 神像2 男神坐像

材質 : 針葉樹

サイズ : 高さ 15.2 cm、幅 9.0 cm、厚み 4.5 cm

備考 : 劣化小

木芯をはずした一材から彫り出す。頭部に巾子冠を戴き、袍を身にまとして胸前で拱手する典型的な俗形男神像である。像容を比較的良好にとどめているが、面貌は磨耗によって失われている。肩幅が広く、安定感のある体躯ながら、奥行が浅く下半身の表現を省略した表現は、平安時代後期以降の神像の典型となる造形様式である。

◆ 神像3 女神坐像

材質 : 針葉樹

サイズ : 高さ 13.0 cm、幅 8.6 cm、厚み 5.0 cm

備考 : 劣化小 下半部の劣化は大(過半部の劣化は安置した状態で生じたものか)

木芯をはずした一材から彫り出す。大袖の袍を身にまとい、髪を頭頂で左右に振り分ける。目鼻立ちは磨耗によって失われているが、豊満な卵形の面部から、ふくよかな女神の表情を想像させる。左手の状態が判別しがたいが、右手を折り曲げて胸前に寄せていることから男神像と同様、拱手の姿勢をとっていたものと考えられる。下半身は失われているが、大多数の女神像と同様、坐像であった可能性が高い。大きさや作風からみて男神像と一対をなしていたと思われる。

◆ 神像4

材質 : 広葉樹

サイズ : 高さ 11.8 cm、幅 6.8 cm、厚み 3.8 cm

備考 : 劣化大

一材から彫り出す。損傷が著しく、頭部および両腕をあらわす突起が確認できるのみである。丸みがかった頭部の形状やなだらかな肩のラインから、女神像であったことが窺わせる。

◆ 神像5

材質 : 針葉樹

サイズ : 高さ 10.5 cm、幅 9.2 cm、厚み 5.0 cm

備考 :劣化中 下半部は水平に欠落(過半部の劣化欠落は安置した状態で生じたものか)

一材から彫り出す。面部の大半および下半身を失う。両手を胸前で拱手していることがわかる。なだらかな肩のラインは、女神像であったことを示唆するか。

【塩津港遺跡出土の華鬘】

材質 :針葉樹

サイズ :長さ 18.5 cm、直径 1.3 cm

備考 :房の部分に漆状のものが付着

本品は華鬘の中央に据える総角の一部と考えられる。総角は組み紐の結び方の一種で、二条の紐を垂れ、中程で結んで左右に輪を出し、下方の先端部に房を付ける。本品は総角を半裁したもの相当し、結び輪、垂下する紐、先端の房飾りが確認できる。中世以前に遡る華鬘の遺品は少なく、さらに木製の華鬘に限るときわめて稀といえる。



津港遺跡の神社の想定図